



## 真言宗の真髓を究めた人

かなやま ぼくしょう  
金山 穆韶 (1876~1958)

金山穆韶(本名 岩太郎)は、明治9年(1876)10月30日、新川郡文珠寺村(現 富山市大山)に金山忠吉と母 はる の次男として生まれた。幼いときから信仰心篤い家族から影響を受け、寺にお参りしたり高僧の話の聞いたりする機会が多く、僧になることにあこがれをもつようになった。そして、明治21年(1888)3月、12歳の時、大岩山日石寺に入門し「法龍」の僧名を受けた。日石寺での修行中、3年程体調を崩したが、その間、戒律を守り、哲学や仏教の知識を学んだ。明治30年(1897)4月、日石寺の推薦により、高野山大学林(明治40年より大学となる)に入学して、真言宗の根本理念を学ぶことになった。

明治34年(1901)6月大学林を卒業して富山に戻ったが、真言宗の真髓を究めたいという熱い向学心を抑えることができず、再び高野山へ行くことを志した。しかし、今回は日石寺の支援を得られず、実家からわずかの仕送りを受け、高野山にある無住となっていた宝性院という庵で、4年間自炊生活をしながら修行と研究に打ち込んだ。その実績が認められ、明治38年(1905)29歳の若さで高野山大学林の教授に抜擢された。

明治43年(1910)、請われて大学を休講し、兵庫県美方の長楽寺の住職となり寺の復興に尽くしたが、寺と檀家の多くが大洪水に被災し、高野山へ戻ることになった。その後、より熱心に修行に打ち込み始めた。大正2年(1913)から昭和9年(1934)までの21年間にわたって、庵から4kmほど離れた弘法大師祖廟に参詣した。大正11年(1922)僧名を「穆韶」に改めると、48歳になった大正13年(1924)、徳島県大龍寺で50日間、虚空蔵菩薩の法号を一日に百万回唱える「求聞持法」の修行を行った。そして、昭和4年(53歳)、同15年(64歳)、同20年(69歳)に21日間、毎日3回護摩を焚き、さらに7日間は穀物を食べないという難行中の難行である「八千枚護摩法」の修行を行い、生仏一体の境地に達した。

昭和15年(1940)、穆韶は戦争が激しくなる中、高野山大学の学長に推薦され、就任した。学長に就任して間もなく、戦争遂行のため政府から東京や京都の仏教系大学と高野山大学との合併の命令が何度も出された。しかし、文部大臣に高野山大学存続を訴え続けるため、何度も上京し戦時下において絶対であった政府の命令に屈することなく、高野山大学の自主・独立を守り通した。

真言宗の僧侶としての修行、学問の研究者・教育者としての成果、学長としての功績により真言宗の人々すべてが認める存在になった穆韶は、昭和28年(1953)、78歳で「高野山真言宗管長」「総本山金剛峯寺座主」に就任した。人情味豊かで人をとがめることのない誰からも慕われる人であったという。

また、昭和24年(1949)から、地元の願いを受け、明治の神仏分離令で廃止された俱利伽羅長楽寺を再建すべく道路整備をはじめ俱利伽羅山全体の復興に尽力し、昭和28年(1953)9月、俱利伽羅不動寺本堂を完成させている。

強い意志と厳しい修行、学問の研さんを通して真言宗の開祖弘法大師の教えを体現した金山穆韶は昭和33年(1958)、高野山天徳院で亡くなった。享年82歳。

〈専門員 松井 功一〉



穆韶の直筆と落款



—大山歴史  
民俗資料館所蔵—



俱利伽羅不動寺本堂

—令和2年8月撮影—